
第1章

環境学習とはどんなもの

- この本をお使いになるあなたへ
- 環境学習といえば、どのようなイメージがありますか？
- 環境学習 Q & A
- in about forの環境学習
- 何のためのプログラムなのか
- まずは体験してみよう！

この本をお使いになるあなたへ

今、いきいき暮らしていますか？

このテキストは、あなたが“地域”で“職場”で、あるいは“学校”や“仲間との集まり”で、いきいきと暮らすためのワークブックです。環境学習には、いろいろな分野がありますが、ここでは目先の環境問題を解決するための、知識や技術を羅列するのではなく、生きものや地域に対して、あたたかい心を持った人を育てるために「より創造的で楽しい“関係”をつくる方法」を中心に、すすめていきたいと考えています。

自分を好きになると、世界も好きになれる
生きていることを歓べるようになる
鳥や、花や、虫や
山や、空や、風に揺れる木々も
おなじ時を生きている仲間として大事にしたいと……

環境学習のプログラムをたてる時、まず「参加者の要求度を考える」ことが留意点としてあげられます（P 59 参照）。環境学習と呼ばれているものは範囲が広いだけに、どんな切り口で提案するかが課題でした。「求められるものは何なのか？」人との会い、情報収集をすすめる中で、思いあたったテーマが2つあります。それは、“わくわくした気持ちをふくらませるための『環境学習を展開する能力』”と、“いきいき暮らす仲間とつながるための『ネットワークの方法』”です。

こうしてテキストは、この大きな2つの課題に答えようとする形でまとめられました。そのために必要な情報はできるだけ盛り込んだつもりです。この情報が、あなたの「???」を解く手がかりとなればうれしく思います。しかし、何より、一番大切なものはあなたの“かかわろうとする姿勢”です。そしてこのテキストは、読んで「そうかー」で終わるのではなく、あくまでも“素材提供、”きっかけの場にすぎないことを、心に留めておいてください。

このテキストは読むことが目的なのではなくて、読んだあとの『あなた』が主役。今まで見過ごしていた問題をみつける“目”を開く刺激になれば幸いです。

環境学習といえば、 どのようなイメージがありますか？

「自然破壊の状況について知ること？」「環境汚染についての勉強会？」……もちろん環境について知ることや知識を得ることも重要ですが、ここでは知識中心とは違ったアプローチを提案したいと思います。

それというのも、本当に大切なのは“感じるころ”だと思うから。そう、あなた自身の問題として、あなたの心でとらえ、そして行動することが、今求められているのです。“心でとらえる”とはどういうこと……？少し視点を変えて考えてみましょう。

* * * * *

ぽっかりと予定の空いた休日、たまには街に出てみましょう。ブラブラ歩きのウインドーショッピング。「この服ちょっとステキだなー」「あれっ、こんな便利なものがあるんだ」なんて思いながら、ふと、気がつくとお昼過ぎ、急におなかがいってきました。すると今まで、全く目にとまらなかった“たべものや”の看板が、にわかに目に飛び込んできます。うどん、定食、イタリアンレストラン。ファーストフードの華やかなポスターetc……どうして今まで気づかなかったのか、不思議になるくらいに。次々と迫ってくる魅力的な誘いの中から、コレと思ったお店に入って、あ～満足。お腹いっぱいになって出てくると、あ～らフ・シ・ギ。今度は“たべものや”なんてぜんぜん目に止まらない…こんな経験はありませんか？

この「お腹がすいた」という記号が、“環境学習”です。

今、街にも家庭にも情報があふれています。テレビの前にゴロンと横になるだけで、世界情勢から南極のペンギンの生態、駅前のおいしいラーメン屋に至るまで、さまざまな情報を運んでくれます。膨大な情報の中、私達は自分に必要だと思うものを受け取り、いらないと判断したものは瞬時に切り捨ててきく……そんな生活を余儀なくされています。「地球環境について」の危機も「環境破壊について」の現状も、その気になればすぐに専門家なみの資料が揃うことでしょう。そう、欲しいと思うものはすでにあなたの周りに用意されているのです。ちょうど、街で“たべものや”がひしめいていたのと同じように……。

活用できるか否かは、「情報を『あなた』が選べとれるかどうか」「心の奥から価値をみいだせるかどうか」に、かかっているのです。「お腹がすいた」という信号が、たべものやを見る“目”を変えさせたように、「環境学習」というきっかけが、あなたの暮らしに対する“目”を変えさせてくれれば……と願っています。

環境学習 Q & A

Q ; 環境学習って何なのか、いまひとつよくわからなくて……知識がなくて不安なんですけれど、どんな勉強をすればいいのでしょうか？

A ; 環境学習の範囲については、のちほど詳しい解説をしますが (P. 150参照) なかなかつかみきれないもの。環境学習とは何か？なんて抽象的なことや抽象的な知識を求めることよりも、問題解決の一案として、環境学習を活用することが求められているのではないのでしょうか。環境学習は、学者の研究対象としての学問ではなく、実践的にすすめられてこそ生きる、いわば現場の道具のようなもの。知識を重視するよりも、むしろ『なぜ？』の気持ちでものをみる習慣をつけることを、大切にしたいと考えます。

もし、手がかりとして、または自身を持って人に対するための“知識”を、と言うのであれば、人間が原因だという視点を持って、環境問題についての情報集めをしてはいかがでしょうか？ 焦点を絞りにくい環境問題を“自分たちが”引き起こしたという視点で見つめ返すとき、これからはどういう考え方が必要なのか、どういう人を育てたいのかが明確になります。ゴールが見えにくい問題ほど、方向をしっかりとみえることが力となります。「伝えたい」と思うあなたの気持ちを、より大きく育てることが、環境学習を知るための一番の近道になるでしょう。

Q ; 環境問題って幅がひろくて迷っています。今、水のことにたずさわっているのですが、それとは別にゴミのことも、たべもののことも気になって……でも、全部のことにかかわる時間なんてないし……この、ひとつの問題だけにかかわっていていいものでしょか？

A ; 個々をみるとバラバラに見えるこれらの課題。でも、その問題も不思議なことにつきつめると同じ問題点につきあたります。ためしに、別の場で活動をすすめている人と話してごらんください。問題点は驚くほど似ていることでしょう。……と、いうことは、言い替えればどの問題に携わっていても、全ての問題にかかわっているのと、同じことだとは考えられませんか？ 今、自分がかかわっている問題で、なんらかの解決、もしくは進展がみられれば、それは、他の様々な問題に対しても、解決の糸口を与えて入ると思っていいいでしょう。

確かに全ての問題にかかわることはできません。でも縁あってかかわった、今、目の前の問題に取り組むことで、本質的には全ての問題にかかわることになるのです。部分的なことにとらわれず、大きな視点や目標を持って、常に自分の活動位置を確認するように習慣づけると『焦り』や『無力感』にとらわれることなく、楽しくできる……と思います。

Q ; 例えば清涼飲料は「ビンか缶か」なんて議論がでたとき、エネルギーや資源を考えるとビンがいいという判断がされますよね。そうすると缶工場で働いている人達を、非難することになりませんか？また、親が缶工場に勤めている子供は、親を悪い人だと思ったりしないでしょうか？



A ; 環境学習では価値観を押し付けるようなことはしません。この例で話をすすめるなら、ジュースを飲むなら「缶よりビンのほうが環境に対する負荷が低いよ」という“事実”を明らかにするだけ。その先の、「どういう行動をとったらいいか」を考えるのは、ひとり一人の判断にまかされているわけです。環境学習では、議論された問題自体の大切さも然ることながら、そこに至るまでの過程こそが、いちばんに重視したいことです。判断する力を育てることが、目的ですから「缶が悪い」「車が悪い」「添加物が悪い」といった、〇×式の思考になりませんので御安心ください。

Q ; 他でも、いろいろな環境学習の講座が開かれているようだし、わざわざ自分がかかわる必然性はあるのかな？

A ; 今、文部省をはじめとして、環境学習を導入しようという動きが日に日に高まっています。それでも、長年受け続けた教育の影響は大きくて、言葉では環境学習を掲げていても、実際には？？？の内容が多いのが現状です。だからこそ、興味をもった『あなた』が直接伝えることが、今、求められているのです。“こんな感じかな”と、たとえ手さぐりでもOK。あなたの思いを確認する意味も含めて、環境学習の講座あるいは、仲間も誘いあって何かをはじめてみましょう。

人が一番に得意とすることは「忘れること」とも言われます。ましてや、刺激的な情報が次々とふりそそいでくるものだから、水や緑の大切さ、地球環境の状況のことも、聞いたその時は「そうか！」と奮起するものの、すぐに他のものごとのカゲに隠れて見失ってしまいます。大切なことは、繰り返さなくちゃ！しつこいかな……と思っても、ことあるごとに何度でも繰り返すことで、人のところに落ちていきます。何度も繰り返すことで、頭の中がそのものの持つリズムに変わってきます。はじめは理屈での理解だけだったことが、からだでの理解、こころでの理解にかわってきます。繰り返しのなかで、揺るがないものになり、少しずつ気持ちに即した判断ができるようになるでしょう。

だからこそ、環境学習の機会は多ければおおいほどいいのです。こころよい関係をひろげるために、そしてあなた自身を豊かにするためにも……

in about forの環境学習

in about for と環境学習

今までの教育は、環境（自然）の中で行うin教育、あるいは知識を伝授するabout（～について学ぶ）教育が中心にすすめられてきました。たとえば、「植物について」「地質について」「歴史について」……など、個々の分野が別々に教えられてきました。もちろんここで知識教育を否定するつもりはありません。確かに問題を知っているからこそ「なんとかしなくっちゃ」と考えるのでしょうし、環境問題の解決には、科学的知識が大きく貢献しているのですから……。

とはいうものの、「ちょっと知識教育にかたよりすぎていない？」「知識は得たけど、それでどこが変わったの？」という声が徐々にささやかれ始めました。そこでこんな声に答えようと、新たに注目され始めたのが環境のためにどうしたらいいかを考えるfor教育です。

与える学習からプロセス重視へ

「知識が生きた知恵として働かない」あるいは「想像力を働かせて現実に応用できない」といった点を補うために出発したfor教育の目的は「知識と体験をつなげること」です。例えばの話、森林破壊の現状を数値を上げて説明する人を育てることよりも、自分の家に送られてくる多い大量のDMを見て、森林破壊の現状に思いをはせることができる人を育てることです。そのためにforを重視した環境学習では、答えを与える学習ばかりではなく、体験の機会を与え、その過程で「そう感じたか」「何を考えたか」に注目するような、体験学習（第6章資料編参照）で扱う要素を多くとりいれています。

細切れの about(知識)をつなげるための for(視点)

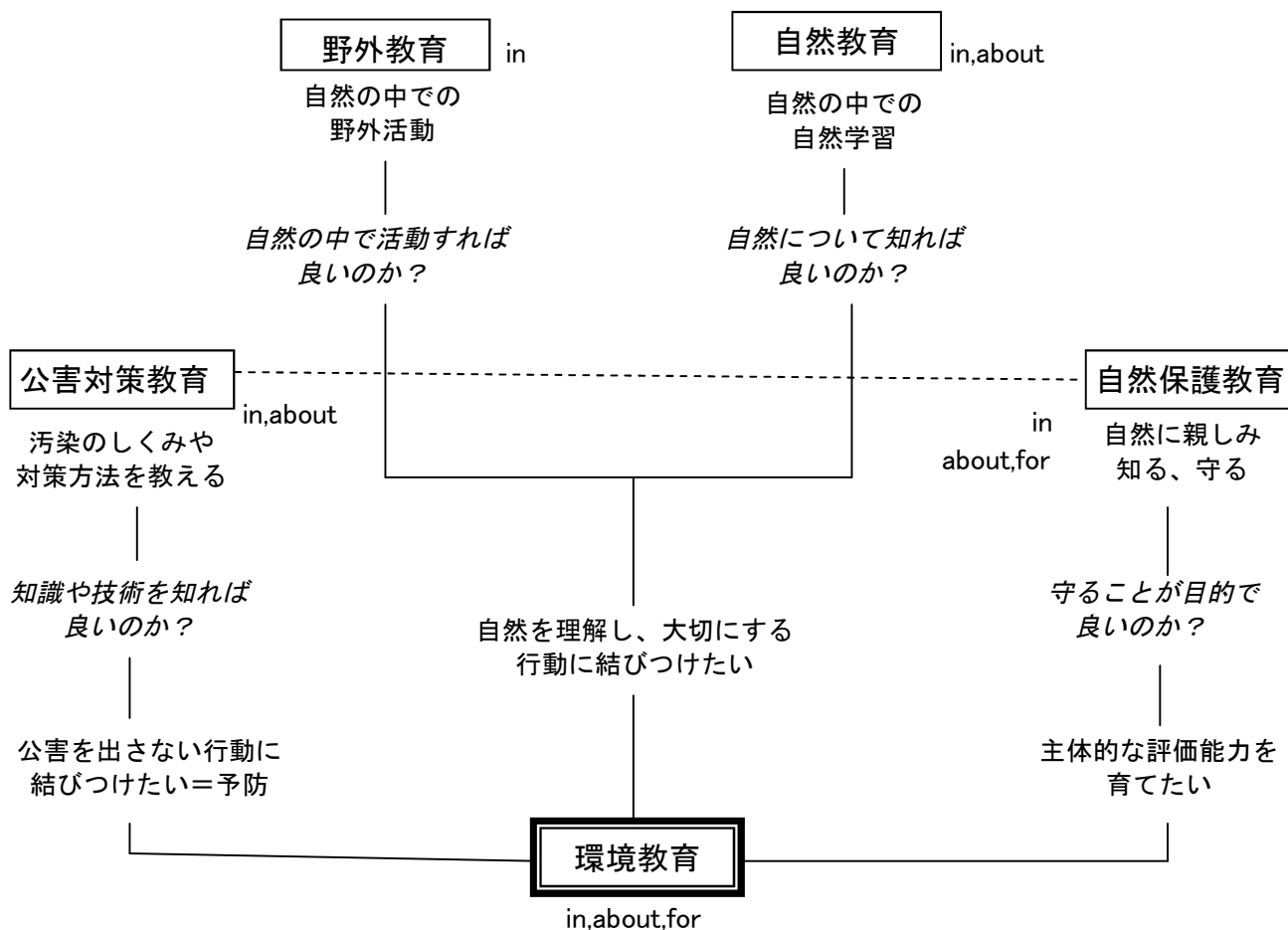
細切れの知識を自分のものとして『わかる』ためには、視点を持つことが必要です。「人と人」の関係も、「人と知識」の関係もただ知っていればよいという訳ではなく、理解を深め、つながりを感じられてこそ血がcaよ、イキイキと輝きだすもの。求められているのは、この「つながりの回復」ではないでしょうか。

このテキストは環境のために今、何ができるのかという視点をつかむためにつくられました。そうは言っても、こちらが用意できるのは素材の提供や考え方の事例くらいのも。喉の渇いていない牛を水場に連れていくことはできても、水を飲ませることはできないのと同じように、そこから先どう展開していくかは、あなた自身の問題になります。なぜなら、『知識』と違って『視点』は、一方的に与えることができないものですから……。各個人によって、それまでの経験は違うのですから、同じことを体験しても、反応はそれぞれ違って当たり前。だからこそ『視点』もオーダーメイドでなくては意味がありません。こちらが用意したきっかけを、どう『体験』に結びつけて暮らしの中でわかっていくかは、あなたの“切実さ”にかかっているのです。

多様な価値観を大切に

さて「環境のために」という時、少なからず価値評価が問題とされます。ここでいつも怖いと思います。なんだか人の価値観を操作するようで、いいのかな……と。こんな時は、Nature＝自然に目を転じてみましょう。人間も自然の一部、自然界から学ぶことはとても多いものです。「多様であるからこそ秩序が保たれる」というのは、この大切なメッセージのひとつ。この考えに立つならば、一見、地球環境のために特効薬のように見えても、全ての人が同じ価値観のもとに束ねられる「エコロジー教」「地球教」的なものは、むしろバランスを欠いた不安定でアブナイもののよう映ります。

環境のため、地球のために考えることや、その源泉となる価値観は、多様であってこそ健全。そして考え方・価値観が多様であるからこそ、よりよい道を探っていくのだと思います。そう、もしかしたら煙草を吸い、車が好きな人の視点が、環境問題の解決のキーを握っていた……なんてこともあるかもしれません。そんな可能性をいっぱいに広げるためには、あなた自身の多様な価値観をはぐくむことが不可欠です。『誰か』が作った“できあい”の価値観にのっかるのではなく、実際的な人とかかわり、地域活動、環境を考える活動、環境学習など、あらゆる機会を捉えて『自分』を育てることが、何よりも大切にして欲しいことなのです。



何のためのプログラムなのか

知識によってひろげられる認識は、限りがあります
しかし意識によって
その認識は何倍にもひろげることができるのです

「ひとさしの醤油でふろおけ一杯、味噌汁一碗でふろおけ5杯」……何のことだかわかりますか？これは排水として流した時、魚が棲める水質に薄めるために必要な水の量のこと。だから流しに捨てないように……といったタイプの「地球を救う〇〇の方法」が、まるで呪文のように流行した頃がありましたが、最近はどうも下火のようです。「だって、いくらガンバッテ排水に気をくばっても、電気をこまめに消しても、世の中変わったようには見えないし、あれもこれもと考えていると疲れてしまうんだもの」と言った声が返ってきます。また一方、「環境問題は『～するな』といった禁止事項と『ゴミは分けろ』といったしつけ教育的な強制事項が多くて……窮屈な話ばかりで聞く気がしない」という声も耳にします。

環境問題の本質的な話、例えば近代合理主義の問題から解き起こせば“むずかしい話”と閉口されてしまうし、かといって、そこを避けて具体的に「こうしましょう」と言えば、“説教くさい話”と嫌がられ……どちらにしろんでも、なかなか耳を傾けてはもらえないのが環境問題だったのです。

“なんとかならないの”こんな声を出発点に、環境学習のプログラムは考えられはじめました。

振り返って…

これまで環境問題に関心を持ってもらいたい、改善するための1歩を踏み出してもらいたいという趣旨の集まりでは、どんなことがなされてきたのでしょうか？

よくあるのは……地球の温暖化、熱帯雨林の減少、水の汚れ具合などの客観的なデーターを示し、環境が悪化していることを論証して、結論として「悪化の原因となる行動をやめよう」「環境に配慮したしくみを考えよう」といった提言をすること。確かに客観的なデーターを並べられると現状はわかるけれど……そこで示された客観的な情報を「行動」に取り入れられるか否かは、その人自身の問題＝内面に対する働きかけが必要になります。それでは、なぜ説得力のあるはずの事実から導き出された結論が、ある人には共感を呼び、もう一方、別の心には響きあわないのでしょうか？

それではもうひとつ、あなたが環境のことを考えて、行動するようになったきっかけは何ですか？あるいは、他の人にも働きかけたいくなるのはどんな時でしょうか？

たぶん……さまざまな情報を受け取る中で地球環境悪化のイメージがふくらみ、切迫した恐怖感を感じるに至ったためではないでしょうか？

ところが近所の人にコトのあらましを話し、「何か対策を実行しようよ、考えていこうよ」と持ちかけても、あまり乗り気でないことがままあります。知識は伝わっても、語りかけた側と同質の心の動きや恐怖感までは伝わらなかったのでしょうか。こんな時「どうしてわからないの！」とくやしがっても仕方ありません。同じ知識を得ても、思い描くイメージにギャップがあるのですから……。

ではどうしてこんなにも、イメージの違いがあるのでしょうか？ひとことで言ってしまうと、これまでの経験や体験の違いから……ということになります。

「めんどくさい」「私だけがやってもしかたない」と思いがちな人は、身近な自然や人とのつきあいが希薄で、自然とも人とも、豊かな関係がつけられていないことが多いようです。喜びや悲しみをわかちあう機会が多いほど、イメージも豊かになり、ひとつの事実から感じとることのできる世界が広がっていくもの。もし、あなたが描いたイメージのように、自分とのつながりをみいだせるような、あるいは、他者の立場になって考えることのできるような感性が育てば、地域の環境も地球の環境も、もっともっとよくなっていくことでしょう。

そんな人々への働きかけの方法を考えていくのが、環境学習のプログラムです。

便利で快適な生活の影で……

便利な生活は、一方では自然や人間社会を深く知る機会を奪う魔性を秘めています。排水やゴミを自然還元して、生活圏内の目に見える所で処理していた時代には、身近な自然や近所の人に配慮しないことなど考えられませんでした。なぜなら、そんなことをすればたちまち問題が自分へとつき返されたからです。自然を、そして近所の人のことを考え、よく知り、いかにうまくつきあうかは、そこで暮らすための必須条件だったのです。ところが、現代はつきあい方を知らなくても生活ができます。浄水場がどこか知らなくても水は飲めるし、自分の出したゴミがどこへいくのか

知らなくても、暮らしは成り立つのです。こうなると必然的に、生活圏内のさまざまな生きものや、人間の実像が見えにくくなります。捨てたゴミは、目の前から見えなくなった時に、なくなってしまったような錯覚を起こします。しかし現実には右から左へ移動しただけのこと。問題の解決は棚上げされたまま、ゴミは依然として、どこかに横たわっているのです。

本来であれば、体験を通して磨かれる『感性』が、この関係を結ぶ“イメージ”を育ててくれるはずでした。ところが残念なことに、便利さは「人と自然の関係」「人と人との関係」をも希薄にしまいました。人間社会にみずから働きかけ、体験していく中で成長する「感性・イメージ・欲望・感情」の発達をも停滞させてしまったのです。

そうです……現代は便利になった半面、このイメージを広げる『体験』が、おいてきぼりをくってしまいました。井戸水や谷川の水を利用していた時代には、日常の生活の中で当り前に体験できた水と生活とのつながり。けれど、現代では水源も排水も行き先も見えないし、ましてやつながりを体験するなんて、とても難しいこととなってしまいました。しかし、今この地球上で起こっている、複雑にからみあった問題を解くには、イメージネーションの能力がどうしても必要です。

そこで、このつながりに意識を向けてもらおうというのが、ここでいう環境学習です。そして、これから取り組もうとしている「環境学習のプログラム」とは言い替えれば、いかに「つながりを体験させるか」「イメージを豊かにできるか」ということの試みなのです。

想像力は
希望や夢をかなえるために
授けられた能力なのかもしれません……

まずは体験してみよう！

現在の環境問題を考える時、人間本来の感受性の低下、欲望の増大、自己疎外や無関心といった、『人間のありかた』の問題を切り離すことはできません。ますます多様化する人々の暮らしと、それを支える様々な価値観。こうした多様な価値観を、同じ地球に暮らす者として『共有する』ことが、今求められているのです。異なる価値観やライフスタイルを持つ他者と、どのようなかわりあいを持ち、どうすればお互いに満足できる生活が送れるのか……？

ちょっと堅い話になってしまいましたが、問題提起の意味も含めたワークをひとつご紹介します。まずは、暮らしのふりかえりをしてみましょう。これには、準備が必要です。まず、身近な5～6人に声をかけてください。仲間とワークを行う理由は「そのほうがず～っとおもしろい」から。生活って「日常」ですから、さして気にもとめないし、あえて話題にもしないけれど、毎日のことだからこそ、結構、価値観があらわれているものです。考え方、感じ方は、人によって違って当然。だからワークの回答は千差万別。???自分では当たり前だと思っていたことが、実は他の人には特別なことだったり、自分の意見を話すことで、逆に自分の意識に気づいたり……。 「あたりまえ」や「なにげなく」の行動にスポットをあてることで、開けてくる世界は、とても興味深いものだと思います。

さてお誘いのメンバーが揃ったら、次のページを人数分コピーして準備はOK。さあ、はじめましょう！ワークのすすめ方は、以下の進行を参考にしてください。

ワークのすすめかた：

- 1) 各自に、率直な気持ちでメニューの「重要度」の欄に、大切だと思う順に1～5の番号を記入。簡単な「理由」もあわせて、隣の欄に書く。
- 2) 重要度を書き終えて感じたこと、思ったことをその下の[]内に書く。
……以上までが個人のワーク。ここから先はグループワークです。
- 3) 簡単な理由と共に、重要度の順位を発表しあう。その結果は「グループ集計表」に記入する。
- 4) グループでの順位を決定する。各々の、メニューに対する考えを話しあいながら、全員の合意による集団決定を行う。なお、決定に関しては全員で留意点を読みあわせ、メンバー全員で確認してから行うようにする。

※メンバーの満足度を見ながら、十分だと感じたら、ここで終えても構いません。メンバーの雰囲気を見て、もう一步すすめることが可能だと思ったら「ふりかえり用紙」を渡し、記入してもらいます。これは、個人の“気づき”についての確認なので、公開しなくても結構です。希望があれば、「ふりかえり用紙」記入後、もう一度話しあいをするのも興味深いことですが……そこは状況をみて判断しましょう。

地球への恩返し

私たち人間は誰であれ、生活している限り何らかの形で環境に影響を与えています。次にあげる5つの項目は、私たちなりに地球に恩返しするために、身近なところで実行できるメニュー表だと考えてください。

あなたが地球を守るために大切だと思う項目から順に1、2、…5と順位をつけ、その理由も簡単に書いてください。

個人記録表

メニュー	重要度	その理由は……
使い捨てのコップ、ペーパータオル、ナプキンなどは使わない		
買物の時には袋を持参する		
肉より野菜や豆類をよく食べる		
歯磨き、洗顔、髭剃りは、蛇口をしめて行なう		
自然のことに気持ちを向けた り、直接ふれあうようにする		

ふりかえり

地球への恩返し グループ集計表

メンバーの名前									グループ
使い捨てのコップ、ペーパータオル、ナプキンなどは使わない									
買物の時には袋を持参する									
肉より野菜や豆類をよく食べる									
歯磨き、洗顔、髭剃りは蛇口をしめて行なう									
自然のことに気持ちを向けた り直接ふれあうようにする									

出典：川島恵美「環境教育読本」 pp.286-291,1992,教育開発研究所

集団決定をする時の留意点：

- 1) 充分、納得できるまで話しあってください。自分の意見を変える場合には、自分にも、他のメンバーにも、その理由を明らかにすることが必要です。
- 2) 自分の判断に固執し、他に勝つための論争（あげつらい）は避けてください。
- 3) 決定するのに、多数決とか、平均値をだしてみるか。または取引するといった「葛藤をなくす方法」は避けてください。また、結論を急ぐあまり、あるいは葛藤を避けるために安易な妥協はしないでください。
- 4) 少数意見は、集団決定の妨げとみなすより、考え方の幅を広げてくれるものとして尊重することが大切です。
- 5) 理論的に考えることは大切ですが、それぞれにメンバーの感情やグループの動きにも、十分配慮してください。

ふりかえりシート

1. この実習の中で、あなたは、

1) 自分の意見を主張できましたか？

	1	2	3	4	5	6	
全く主張できなかった							十分主張できた

2) メンバーはお互いの意見を聴きあっていましたか？

	1	2	3	4	5	6	
全く聴きあっていなかった							よく聴きあった

3) 今のワークに興味が持てましたか？

	1	2	3	4	5	6	
全く興味を持てなかった							とても興味深かった

2. 自分の意見（個人決定）を変える、または変えない時、他のメンバーに対してどのような感じを持ちましたか。

変えた時

変えなかった時

3. 意見（個人決定）変更で、印象に残ったのは、

誰が、何を変えた時

どう感じ、または思ったこと

4. よい意味での妥協ができるために、どのようなことが必要だと思いますか。

5. その他、感じたこと、気づいたこと、学んだことは、

協力：SMILE（聖マーガレット生涯研究所）

自分のこともきちんとできていないのに

人前で環境学習なんておこがましくって……なんて言う人も多いけれど
できないからこそ

わからないからこそ

知りたいからこそやってみるのが環境学習。

今のワークのいいだしっぺのあなたは、特別な知識がもとめられましたか？

特別な経験が必要でしたか？ そんなことはなかったでしょう。

あなたに求められるものがあつたとすれば、“今ここで”の気持ち

そして“オープン”であること。

そしてそれは、他の誰にも求められた感覚だったのではないのでしょうか……。

人とのかわりで見えるもの……

「地球への恩返し」ワークはいかがでしたか？

個人の記録表に記入した時の気持ち、他の人の重要度の順位を聞いた時の気持ち、そしてみんなの意見を出しあいながら、グループ順位をまとめていった時の気持ち……それぞれにどんな感情をもったのでしょうか？

人前で意見を話す時には「なんとなく」思っていたことを、もう一度自分に引き寄せて再考する必要があります。普段は意識にのぼりにくい考えを、言葉にすることで「そうか、私ってこんなことを考えていたんだ」とか「あっ、今の言葉ってぴったり。これが言いたかったんだよ」なんて具合に、頭の中を整理することができたりします。また、意見を交わすことで「こんなふうに考えることもできるのか」とか「あれっ、この人って案外、私と同じことを考えているんだな」。時には「そういえば人の意見にのっかってばかりで、自分であんまり考えてなかったな」なんて考えさせられたり……。ひとりでは気づかなかったこと、知らなかった情報、考えの及ばなかったことが、人との関わりのなかで、はじめてわかることも多いのではないのでしょうか。

自分自身への気づき

他者とのかわりのなかから生まれる気づき

自分がその場に与えている影響

人に与えられている影響……

あの「集団決定をする時の留意点」に従って、話をすすめることができましたか？最後に、全員納得して順位を決めることができましたか？

どうしても相容れないこだわりがぶつかりあい、ひとつにまとめることができなかったとしても、討議がオープンな関係ですすすめられていれば、大きな発見があつたことと思います。自分の意見を変えることの難しさ、偏見なく話を聞くことの困難さをはじめとする、様々な葛藤……。時間はかかるし多少シンドイけれど、それでも納得しながら、お互いの気持ちを確認しながらすすめていく方法は、確実に『わたし』と『みんな』をつなぎます。単なる知識として「知る」以上の「生きた知識」とも呼べる、確かな手ごたえが得られます。人と意見を交わすことで気がつく世界の、なんて奥深いことか！そんな中でこそ、自分なりのものの見方・考え方・価値観がはぐくまれ、『わたし』への理解が深まり、他のものと楽しくやっていける知恵も身につくのではないのでしょうか。……あなたはどうか考えますか？